

Title	日本博物学史覚え書 XII
Sub Title	Notes on natural history in Japan (XII)
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 No.31 (2002. 3) ,p.31- 52
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20020331-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本博物学史覚え書 XII

磯野直秀

Notes on Natural History in Japan (XII)

Naohide ISONO

1 曾占春を薩摩藩に推薦した人物

曾占春(1758~1834)は17歳のとき庄内藩に仕えたが、2年ほどで辞し、江戸で田村藍水に本草を学んだのち、薩摩侯島津重豪の記室(秘書)となる幸運をつかむ。そして以後、『成形図説』の編集をはじめ、同藩の本草・博物関係の事業に生涯全力を尽した。重豪の米寿にその事蹟をたたえた『仰望節録』も占春の筆になる。

占春が薩摩藩に仕えるにいたった経緯は、「曾氏家牒」(注1)に「……寛政四年[1792]壬子年三十二[三十五が正しい]秋九月、由蘇山堀本先生之莽推荐、再奉仕於吾薩之重豪公……」と記されているが、この堀本蘇山とは誰なのか。前々から気になっていた。

なかなか手掛かりは無かったが、人物叢書『島津重豪』(注2)で、「官医堀本好益蘇山の推薦」とあるのに気がつき、官医とわかった。そこで、『寛政重修諸家譜』(注3)に当たってみると、堀本家は代々「好益、一甫」を名乗っていて、該当するのは堀本^{つねたか}彝珍である。「母は国^{くに}訓が女」とあり、父の項の記載から国訓は桂川国訓(甫筑)、すなわち桂川^{くにあきら}国瑞や森島中良の父とわかる。このように、血筋は良い。

『諸家譜』の記事を要約すると、明和5年(1768)4月9日に將軍家治に初めて拝謁し、9月6日に19歳で父の遺跡(200俵・月俸10口)を継ぎ、同年10月19日寄合医師となる。天明4年(1784)4月19日奥医師に列するが、將軍家治が没したので同6年10月7日に寄合医師に戻される。ところが、ついで『諸家譜』は次のように伝える——「寛政三年[1791]九月二十九日、かつてより諸大名の邸宅に出入するを事とし、其身分をも顧みざるよし聞えあるのところ、今

〒232-0066 横浜市南区六ツ川3-76-3-D210, 慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received Sept. 20, 2001]

●本稿では、引用文の漢字と仮名に現行字体を用い、濁点と句読点を適宜加えた。引用文中の()は原注、< >は原本の振仮名、□は判読できなかった字、【 】は脱字・送り仮名の補足、[]は磯野による注と補足である。仮名が続くとき、特定の語に下線を付して読みやすくした場合もある。なお、「東博」は東京国立博物館の略。

もなをやまず、曲事のいたりなりとて小普請に貶し、出仕をとどめられ、十月二十九日免さる。八年三月三日淑姫君〔將軍家齊の娘〕の診脈に候すべきむね仰をかうぶる。九年正月二十三日寄合となり、八月二十日奥医に復す」。

『武鑑』(注4)には「堀本一甫」として掲載されており、明和7年(1770)～天明3年(1783)は寄合医師、同4～5年奥医師(本道=内科)、同6年奥医師(口科=歯科)、同7年～寛政3年(1791)に寄合医師。そして翌寛政4年から8年まで『武鑑』から名が消え、同9年に寄合医師に戻り、翌10年からは奥医師(口科)に復活。この経過は、『諸家譜』の記載にほぼ合っている。

『諸家譜』から、堀本好益は寛延3年(1750)の生まれとわかる。明和5年(1768)以来幕医(口科)として勤務するが、寛政3年(1791)に大名家への度重なる出入を咎められ、処罰された。したがって、薩摩侯島津重豪に曾占春を推薦したのは、この処罰以前の話となる。寛政9年(1797)に寄合医師、ついで奥医師へ復帰するが、没年は不明。『旗本百科事典』によると、子息堀本好菴が文化元年(1804)に奥医師として200俵を拝領しているから、好益はこの頃没したか、隠居したのかであろう(注5)。

肝心の件、堀本一甫がどのようにして曾占春と知りあったのかは判らないが、占春の師田村藍水の長男田村元長と次男栗本丹洲はともに幕医であり、そのいずれかを通して占春と知りあったと考えるのがもっとも自然ではないだろうか。

たいした話ではないが、曾占春を薩摩藩へ紹介した人物について、多少わかったことを記しておく。

(注1) 白井光太郎, 本草百家伝, 『白井光太郎著作集』, 第6巻, 科学書院, 1990年。

(注2) 芳 即正, 『島津重豪』, 吉川弘文館, 1980年。[該当するのは111頁]

(注3) 『寛政重修諸家譜』, 統群書類従出版会, 1966～87年。[該当するのは第20巻]

(注4) 深井雅海・藤美久美子編, 『江戸幕府役職武鑑集成』, 東洋書林, 1996～99年。

(注5) 小川恭一編著, 『[寛政以後] 旗本百科事典』, 東洋書林, 1997～98年。なお、本書の該当項では父好益と子息好菴を混同している。子息好菴の名は元悌, 代々の好益・一甫の通称も受け継ぎ, 父と同じ奥医師となった。『武鑑』では, 父子ともに「堀本一甫」と記すので, 区別がつきにくい。

2 飯室庄左衛門の没年

緒鞭会の一員であった幕臣飯室庄左衛門(楽圃)は、本邦初の体系的虫類図譜『虫類図説』を残した人物である。『寛政重修諸家譜』(注1)に「寛政十年七月朔日、はじめて將軍家にまみえたてまつる。時に十歳」とあることから、その生年は寛政元年(1789)とされているが、没年は定かではない。近年の博物誌史関係書には安政6年(1859)没としているものもあるが、その根拠は不明である。

ところが、確実とはいえないが、庄左衛門の没年月を記した資料に偶然出会った。その

書物は、国会図書館蔵の『花史雑記』と題する筆写本（245-50, 2冊；転写者不明）である。伊藤圭介が『東京学士会院雑誌』に明治15年（1882）から28年（1895）まで連載した「花史雑記」のうち110編を写した部分が第1冊全部に当てられているので、この題が付けられているが、第2冊には同誌に掲載された他の報文などの写しも収められている。そのなかには、伊藤圭介だけでなく、黒川真頼の文もある。

この第2冊の方に、圭介が記した「本邦博物起源沿革説」（注2）が含まれているのだが、そこに転写者による幾つかの朱筆書き入れがあり、この人が博物方面の事情通だったことがわかる。たとえば、奥倉魚仙については「通称甲賀屋長右衛門、神田多町ノ人」、増島蘭^{えん}^{らん}には「名固、字孟鞏、又号石原」と正確な情報が書き込まれており、また小原桃洞とその孫小原良直を圭介が混同しているのを誤りと指摘して、良直の出版した『訂字標註 傷寒論』の書名と「嘉永戊申刻」とその刊行年まで正しく記している。

そして、問題の飯室庄左衛門の項の最後にこう書き込んでいる——「安政五戊午十一月、七十九没。市谷薬王寺前、御書院番。自宅および役職は正しく、「安政五 [1858] 十一月没」も信用できるのではないか。ただ、前述の寛政元年生まれなら、「七十九」ではなく、七十となるが……。

記入した人物の名もわからないので、あまりにも頼りないが、まったくの嘘でもあるまい。

（注1）『寛政重修諸家譜』、統群書類従出版会、1966～87年。[該当するのは、その第4巻211頁]

（注2）伊藤圭介、本邦博物起源沿革説、『東京学士会院雑誌』、1編2号・3号、1879年。

3 天明元年～2年の伊豆七島巡見

『伊豆海島風土記』と題し、写本として数多く伝えられている地誌がある（注1）。伊豆七島の動植物の図説が含まれており、興味深い資料なのだが、著者も作成年も記されていない。ただ、本文の記事から安永末年か、天明初年の作成と推定できるだけである。

この資料のことが前々から気になっていたが、一書から糸口が開けた。それは秋山章編『伊豆海島志』（寛政3年=1791序）で、伊豆諸島の歴史を概説した個所に次の記事があった。

「壬寅 [天明2年=1782] ノ春三月、典農司史ヲシテ諸島及ビ小笠原島迄ヲ検尋セシム。恨クハ己ニ小笠原島ニ近ヅイテ潮流迅疾ナルヲ以テ、島ニ上テ探索スルヲ得ズ。外九島ハ其形勝風俗気候産物等詳ニ録シ、又艸木鳥魚ハ別ニ図三巻ヲ為シ、名テ曰『伊豆海島風土記』……」

この文によると「典農司史」が『伊豆海島風土記』の著者らしい。また、天明初年に伊豆七島の巡見と小笠原諸島（当時の呼称は「無人島」）の探索を幕府が試みたことは、従来の博物誌史で見た記憶が無い。興味がつり、関係がありそうな資料を幾つか当たったところ、幕府が普請役佐藤玄六郎行信（注2）と伊豆代官江川太郎左衛門の手代吉川義右衛門秀道に七島と小笠原の巡見・探索を命じ、『七島巡見志』（注3）がその報告書であるとわかった。

(1) 行程・日程

『七島巡見志』に、「巡見使は天明元年（1781）3月29日に江戸を出立し、翌2年10月29日に江戸に帰着した」旨が記されている（注4）が、巡見中の行程・日程は述べていない。そこで他資料を探してみると、断片的ではあるが、大島と八丈島については別資料があった。

まず、大島については、『伊豆大島志考』（注5）に短い記載があった――

「大島之儀、安永十丑年（＝天明元年）御普請役佐藤玄六郎様、吉川義右衛門様、大島御見分として四月十三日昼八ツ時分島御着船、一々御見分の上……同五月朔日、大島より直に三宅島江御渡海……」

これから、最初に大島に立ち寄ったらしいこと、ついで三宅島方面に向ったことがわかる。『七島巡見志』にある新島・三宅島の差出文書（後出）にいずれも「丑五月」とあるから、大島→新島→三宅島と、新島に寄ったように思われる。

八丈島については、『八丈島小島青ヶ島年代記』（注6）にかなり詳しい記事がある――

「天明元丑年島々為御見分、御普請役佐藤玄六郎様・当御支配御手代吉川義右衛門様上下六人……、五月廿四日、三宅島より島伝ひ、汐風に被取、東廻りに中之郷相ヶ江御着船、同所にて御上陸」

「同二寅年、無人島御尋の積りに付……佐藤玄六郎様上下三人……都合三十人乗組、同年三月廿九日御船卸し、八重根へ汐繋り、四月朔日、同所より御出帆。然る所、無人島御尋不行届於海上日数遭難風、漸同年六月豆州下田へ御着船。夫より佐藤玄六郎様は陸地を御帰国……」

「同年、吉川義右衛門殿八丈島に御居残り……青ヶ島へ為御見分、義右衛門殿上下三人……[四月]十九日順風に付、同所[八重根]御出帆……。……吉川義右衛門殿、青ヶ島にをいて御見分[相済]……五月廿四日暮頃、永郷さいまの木と申所より御上陸」

「吉川義右衛門殿、三ヶ島御用向相済、同年七月廿七日、八丈島通用船に御乗船御帰帆」

最後の文の「三ヶ島」は八丈島・八丈小島・青ヶ島である。島々からの差出文書（後出）によると、吉川義右衛門はこの後、利島・新島・神津島・三宅島などに寄ったらしい。

以上の要点をまとめると、

天明元年3月29日 佐藤玄六郎・吉川義右衛門ら6名、江戸出立

4月13日 大島到着

5月1日 大島出立、三宅島方面へ（おそらく新島を經由）

5月24日 八丈島到着

天明2年4月1日 佐藤ら3名が小笠原へ向かうが、暴風で紀伊へ漂着、再度小笠原へ向かうが土佐へ漂着（詳細後述）

4月19日 吉川ら3名、八丈島から青ヶ島へ

5月24日 吉川ら、青ヶ島より八丈島へ戻る

6月20日 佐藤、下田へ入港、陸路江戸へ（注11）

7月27日 吉川ら、八丈島を離れ、おそらく利島・新島・神津島などを回る

10月29日 江戸帰着

この巡見の成果が、次の2資料『七島巡見志』および『伊豆海島風土記』である。

(2) 『七島巡見志』(内閣文庫, 173-121, 8冊, 明治8年転写本)

全16巻。巻16の末尾には「御普請役 佐藤玄六郎／江川太郎左衛門手代 吉川義右衛門」兩名の名があり、「寅〔天明2年〕十月」の日付がある。この『七島巡見志』は、巻1～10が各島の島役人・名主・寺社からの差出文書類で、巻11～13が八丈島差出の図譜、巻14～16が佐藤・吉川兩名の報告と意見書。したがって、巡見使の調査報告書で、いわゆる地誌ではない。

以下が巻構成で、()内は主な文書の差出年月。丑は天明元年、寅は同2年(差出月に巡見使がその島に居て、文書を受け取った可能性が高い)。

巻1：大島(丑四月；注5参照)、利島(寅七月)

巻2：新島(丑五月、寅七月・八月)

巻3：神津島(寅八月)

巻4：三宅島(丑五月・閏五月、寅九月・十月)

巻5～10：八丈島(丑六月～九月、寅三月～十月)

巻11～13：八丈島草木図説(寅三月)

巻14：無人島(佐藤玄六郎の報告と関連文書)

巻15・16：巡見実施の決定までの経緯や、巡見報告書など

巻1～10は本報では触れず、その他の巻について概要を述べる。

巻11～13は八丈島の草木図説。すべて「八丈島産物書上」の題をもち、いずれも「天明二寅年三月 八丈嶋地役人菊池左門」の奥書がある(注7)。各品を彩色図で示し、八丈島での呼び名(薬草木は漢名も)を記載し、木之部ではかなり長い注記を、それ以外では時に短い注記を添える。図は略画的だが、特徴はそれなりに示されていることが少なくない。巻11は「草之部」で全115品、巻12は「木之部」で全68品、巻13は「薬草木之部」で全69品、3巻で草木計252品。原本では巻13に動物も描かれていたはずだが、この写本には「鳥魚鱗介虫之部、闕」と記されているので、転写時には動物の図説が失われていた。

巻14が無人島、現在の小笠原諸島探索に当てられているが、残念ながら失敗に終わった。佐藤玄六郎が巻14冒頭に記している経緯によれば、佐藤らは天明2年3月29日に八丈島を出発して南行し、幾つかの小島を見かけたが、4月5日から暴風雨に見舞われて漂流、同10日に紀伊の三尾浦に漂着、20日に鳥羽港に入る。ここから八丈島に戻ろうとしたが、風向きが悪く、ようやく28日に伊豆の下田に入港。5月19日まで待って下田を出たが、風が強くと八丈島へは近付けないので、直接に無人島に向かう。26日には島影も見えたが、その日から海が荒れ、ふたたび漂流して6月1日に土佐の安良郡甲浦に漂着した。船の痛みも激しく、佐藤はついに無人島探索を諦めたのである。(1)に記した『八丈島小島青ヶ島年代記』の記事によると、6月のうちに船は下田に戻り、佐藤は下田から陸路で江戸に帰ったらしい。

巻16の末尾に佐藤・江川兩名が総括を記し、次の文で終わっている——「此外、島々^{すべ}都ての地理風土之趣、草木魚鳥之類は、別段相認、奉差上候」。この「別段相認」めたものが『伊豆

海島風土記』と思われる。

(3) 『伊豆海島風土記』(国会図書館, W243-N 1, 6冊)

前項の末尾で触れたように、『伊豆海島風土記』は天明元年～2年の伊豆七島巡見の産物である。資料自体には著者名も成立年も記されていないが、巡見使を率いた佐藤玄六郎・吉川義右衛門が編集し、江戸へ戻った天明2年(1781)から間もなく書き上げたと推察される。注1に記したように、『伊豆海島風土記』には図数の少ないものがあるが、国会図書館のW243-N 1本は省略が無い上、図も良く、最良の写本の一つと思う。その構成は次のとおりである。

冊1：八丈島・八丈小島・青ヶ島の地誌

冊2：大島・三宅島・新島・神津島・御倉島・利島の地誌

冊3：樹木図

冊4：草花図

冊5：薬草木図

冊6：魚島海藻図

冊1・2は各島の地誌で、ほぼ地理・歴史・寺社・民俗・産物……の順で記述されており、産物の項には、「大島には野生の羊(注8)が非常に多い」、「御蔵島に近い藺灘波^{いんなんば}という岩島にアシカの群れがおり、4～5里離れた所まで声が届く」、「御蔵島には鰹鳥(カツオドリ)が何千もおり、島人は捕らえて食糧とする」(以上要約)など、博物誌的文章も含まれる。

冊3～5は草木部。各品の彩色図に漢名と島名(島の方言)を添える。樹木類では、各品にかなり長い注記が記されているが、草ではほとんど注記が無い。樹木類は計68品、その全図が『七島巡見志』の図と同じである。草花類(キノコを含む)は101図で、うち93が『七島巡見志』に由来する。薬草木類は計71品、うち68がやはり『七島巡見志』由来の図。結局、冊3～5の全草木240品のうち、229品までが『七島巡見志』の八丈島差出図説に基づく図であった。したがって、そこに記されている「ヘンゴ」(天南星)、「アビ」(イチゴ)、「ノズ」(カタバミ)などの「島名」は、大半が八丈島での名という点に注意する必要がある。

冊6は動物と海藻。草木と異なり、注記のほかに彩色図を伴う品と伴わない品がある。以下に品数を示すが、()内は図を伴う品の数である——魚類34品(28)、貝類16品(12)、鳥類26品(4)、海藻類11品(7)。禽類や魚介類は内閣文庫蔵『七島巡見志』転写本には含まれていないが、原本には存在したらしい。『伊豆海島風土記』所載の動物は、草木類と同じく、おそらく大多数が『七島巡見志』に由来し、「島名」の多くは八丈島の名であろう。

その鳥や魚介類の名には特異な呼び方が少なくない。たとえば、アホウドリは「シラブ」、ノギリザメらしい魚は「カチキトラシ」または「ハツセ」、寶貝のハチジョウダカラは「ハマグリ」、トコブシは「アブキ」、ヒザラガイは「コゴ」、甲殻類のカメノテは「セノカミ」、ジンガサウらしい品には「イソザル」の島名が記されている。

注記にも、興味深いものがある。クロハト(現和名カラスバト)に「嶋ニ多シ……椿ノ実ヲ好ム」(注9)、トキに「八丈ニ多シ、外島ニハ沼田ノ類ナキ故カ見ヘズ」、シギには「三宅嶋御蔵嶋ニ多シ、八丈ニハ少ナンシ」。

(4) 終わりに

こうして、天明元年(1781)に幕府が無人島の探索と伊豆七島の巡見を命じ、前者は失敗したが、後者は任務を果たし、『七島巡見志』と『伊豆海島風土記』の2資料が残されたことを知ることができた。巡見は七島の現状・民生調査が主目的だったようだが、八丈島の島役人菊池左門が提出した動植物誌を軸に地誌『伊豆海島風土記』が作られたので、この地誌が注目され、多くの写本が作られたのであろう。また、八丈島に関しては、これ以後幾つもの地誌や記録が作られたが、秋山章編『伊豆海島志』(寛政3年序)や大原正矩編『八丈志』(文政年間成?)には、『伊豆海島風土記』の資料が利用されている。

一方、天明の巡見の10年後、寛政3年(1791)に幕医田村西湖たちが伊豆七島の薬草調査を行なっている(→次節)。これについて、『年表日本博物学史』(注10)の寛政3年条には、「幕命によって小笠原諸島に赴いたが、目的を達せず、伊豆諸島を巡航」とある。出典は記されていないが、「小笠原云々」は天明の巡見との混同ではないだろうか。

それはともかく、天明の巡見が寛政の調査とどう関わっていたのか、現段階ではまったくわからない。それを探ることも今後の課題の一つだろう。

(注1) 『伊豆海島風土記』には、動植物図に省略が無い資料(A本)と、七島特有でない草木を大幅に省略した資料(B本)の2種類がある。管見に入ったものを挙げると——A本は、国会図書館のW243-N1本、内閣文庫の173-168本、東大総合図書館のJ30-1067本、杏雨書屋の杏663本。B本は、国会図書館のW243-1本・139-67本、内閣文庫の173-140本・173-144本・173-170本、慶應義塾図書館の1000-15本、1000-32本(伊豆之國九島記聞)、1000-77本。また、『八丈嶋風土記』(国会図書館、特1-905)は『伊豆海島風土記』の抄写本であるが、樹木図が無いなど、欠落が多い。

(注2) 佐藤は幕府の普請役。名は行信、通称玄六郎、生没年未詳。天明5年(1785)には、蝦夷を巡見した。

(注3) 内閣文庫蔵『七島巡見志』(173-121, 8冊), 明治8年写本。

(注4) 『七島巡見志』, 巻15, 「伊豆国附島々見分并無人島渡海一件之覚」。

(注5) 立木猛治, 『伊豆大島志考』, 伊豆大島志考刊行会, 1961年。該当するのは126頁, その原資料『天明九年大島差出帳』は未見。なお, 『七島巡見志』にある大島差出書の一部は, この『伊豆大島志考』に所収されている。

(注6) 『日本庶民生活史料集成』, 第1巻, 三一書房, 1968年。小島は八丈小島。

(注7) 『伊豆海島志』が「天明2年3月」とするのは, この奥書に基づくのだろう。

(注8) 「羊」とあるが, じつは山羊である。『七島巡見志』には, 享保以前に幕府(?)が雌雄1対の山羊を大島に下賜した。その子孫が増えたところへ, 享保2年(1717)に逆に幕府から求められて, 雄1匹・雌1匹を献上した。以来, 幕府の御用物というので, みな恐れて手出しをせず, 数百匹にまで増えてしまった。その大群が農作物を食い荒してしまい, 島民は非常に困っていると記されている。

(注9) クロハトの注記には「八丈島」の地名は無いが、大原正矩著『八丈誌』(国会図書館, W243-7)などにもクロハトを挙げている。秋山章編『伊豆海島志』にも、八丈島に「黒鳩、甚多シ」とある。

(注10) 上野益三,『年表日本博物学史』, 八坂書房, 1989年。

(注11) 中里仲舒編『伊豆七島志随』によれば, 8月20日下田着。

[後記] 脱稿後に, 佐村八郎著『増訂国書解題』(復刻版, 日本図書センター, 1979年)が, 『伊豆海島風土記』を「佐藤行信著」としているのを知ったが, 根拠はわからない。注1に挙げた資料のうち, 東大本と慶應1000-15本は目録に「佐藤行信著」とあるが, 資料自体に著者名は無く, 『国書解題』の記載を参考にしたのかと思われる。また, 『伊豆海島風土記』の翻刻本が東海文庫の第12冊(静岡郷土研究会, 1929年)に所収されているとわかった。底本は葵文庫本で, 注1のB本に属し, 図は大半を省略。これも, 解題で『国書解題』により著者は佐藤行信と記している。

4 寛政3年の伊豆七島巡見

前項で述べた天明元年~2年(1781~82)の伊豆七島巡見は, これまで博物誌史では知られていなかった。それに対し, 10年後の寛政3年(1791)4~8月に, 田村西湖(元長, 田村藍水の長男)や, 西湖の門下鈴木良知らが七島を調査したことは, 従来からよく知られている。鈴木良知の略伝「鈴木暘谷伝」中に, 「田村氏奉使採葉于伊豆海七嶋, 官特令先生[鈴木]従其行, 以寛政辛亥[三年]四月朔発程, 其年八月三十日卒事而帰」がその根拠である(注1)。この巡見のときに田村西湖らが編集した図譜『豆州諸島物産図説』については, 「日本博物学史覚え書 VII」(注2)で取り上げ, 式根島(当時は無人)と青ヶ島以外の島々を回ったらしいことを述べた。一方, 最近になって, 巡見の行程や鈴木以外の同行者についての記事2件に出会ったので, 断片的ではあるが紹介しておく。

第一は『八丈嶋年代記』(国会図書館, 229-29)中の次の記載である。本書は『八丈島小島青ヶ島年代記』の一写本で, 『日本庶民生活史料集成』第1巻(三一書房, 1968年)所収の『八丈島小島青ヶ島年代記』「青ヶ島本」とほぼ同文だが, 最終部分がかなり異なり, 問題の七島見分の個所は, 国会本の方が詳しい。なお, 冒頭の「同年」は, 国会本では寛政2年となるが, これは青ヶ島本の3年が正しい。

「同年四月廿七日, 高橋長左衛門船御用船に被^{おおせつけられ}仰付, 御葉草木為御用, 御医師田村元長様, 其外井上貞才老・高野良智老・藍川玄慎老・井上玄亨老[注3], 都合上下拾三人, 御役所より御手代森和吉殿, 御渡海有之, 江府【より】御持参被^{なされ}成候御葉草大賀郷・末吉村・榎立村, 右三ヶ村江御植附被仰付ル[注4]。且, 嶋方御逗留中, 村々ハ不及申, 野山共に御廻村有之。

御逗留之内, 五月廿八日, 小嶋[八丈小嶋]江御渡海有之。尤, 当嶋漁船ニテ御渡海被成, 六月二日当村御廻村相済, 八丈嶋江御帰嶋。

御逗留之内, 五ヶ村流人[八丈島には多数の罪人が流されていた], 御仮屋[役所]江御

呼出し、渡世方之様子、老人別 [一人ずつ] 御尋有之。

当嶋よりも、あした草 [明日草, アシタバ]・山帰来・マタミ [タブノキ] の皮, 其外草木類品々御積出有之。

当嶋御用相済, 同六月廿五日, 服部源五郎預り御船ニテ御帰嶋 [御帰帆か]。尤, 右御船ニテ直に嶋【々】御廻嶋之由, 被仰付【ラ】ル」

第二の資料は短い文だが、文政10年(1798)に大島の村々の代表者が連名で差し出した文書に含まれ、『伊豆大島志考』(注5)に引用されている――

「田村玄長 [元長が正しい] 様上下御捨三人, 江川太郎左衛門様 [伊豆葎山代官, 七島もその支配下] 御手代森和吉様上下御三人に而, 寛政三年亥八月中, 御渡海遊ばされ候」

この2資料には鈴木良知の名は出てこないが、高橋良智(良知, 注3参照)という名がある。この時点で鈴木は高橋姓を名乗っていたのかもしれないが、裏付けとなる資料をまだ見つけられないので、事実を指摘するに留める。

それはともかく、鈴木良知の略伝中の記事を含めて以上を整理すると、次のようになる。天明のときと異なり、往路は大島に寄らず、帰路に立ち寄ったらしい。

4月1日 江戸を出立。

4月27日 八丈島着(注6)。

5月28日 八丈島より八丈小島へ渡る。

6月2日 八丈島へ戻る。

6月25日 八丈島を離れ、ほかの島々の巡見に赴く。(青ヶ島本では26日)

8月 大島に滞在。

8月30日 江戸に帰着。

『豆州諸島物産図説』に記載されている島名によると、八丈島と大島のほか、利島・新島・神津島・三宅島・御蔵島でも調査しているが、それぞれの島にいつ立ち寄ったかは、残念ながら明らかではない。

なお、『年表日本博物学史』(注7)では、「幕命によって小笠原諸島に赴いたが、目的を達せず、伊豆諸島を巡航し……」と記している。だが、本記事の典拠は示されていないし、そのような記録にいままで出会ったことは無い。天明の巡見のときは確かに小笠原探検の命を受け、実際にも南を目指したが、前節で述べたように失敗している。この天明の巡見と寛政3年の調査が、何処かで混同されたのではないか。

(注1) 白井光太郎, 本草百家伝, 白井光太郎著作集, 第6巻, 科学書院, 1990年。

(注2) 磯野直秀, 日本博物学史覚え書Ⅶ, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 26号, 98-116, 1999年。[該当項は第9節]

(注3) 青ヶ島本では、田村元長のほかに「医師四人」として「井上貞才・高野良知・藍川玄信・井上玄厚」の名があり、井上貞才以外の名が国会本と違っている。ただ、この四人の名は『武鑑』には所収されておらず、国会本と青ヶ島本のいずれが正しいかは不明。

- (注4) このとき植えつけた薬草木類については、次の資料に詳しく記されている → 近藤富蔵、八丈実記、『日本庶民生活史料集成』、第1巻、三一書房、1968年。
- (注5) 立木猛治、『伊豆大島志考』、伊豆大島志考刊行会、1961年。[該当記事は180頁]
- (注6) 江戸から八丈島まで1月近くも要しているが、幾つかの島に立ち寄ったか、風待ちで船が浦賀・下田などにしばらく留まっていたのだろう。当時はそれが普通だった。
- (注7) 上野益三、『年表日本博物学史』、八坂書房、1989年。

5 大蔵永常の救荒書

天保の飢饉は江戸時代3大飢饉の一つで、天保4年(1833)には東北地方を中心にその第1波が襲った(注1)。この年、多数の救荒書が刊行されたが、それまでに数々の農書を世に出してきた大蔵永常も、『^{そじき}飢食教草』『徳用食鏡』『^{かまど}竈の賑ひ』という救荒書3点を江戸で出版した。ところが、さらに1点、これまで著者不明とされてきた『^{とひ}都鄙安逸伝』(天保4年11月序)もまた、大蔵永常の救荒書らしいと判明した。結論をまず記すと、『竈の賑ひ』と『徳用食鏡』の主要な項目を継ぎ足して、内容を関西向けに手直したのが『都鄙安逸伝』ということである。

以下、この4書の構成を略記し、本文の概略などを記す。

(1) 『飢食教草』(経済をしへ草)

①刷題箋題:「飢食教草」。②見返:本書の名無し(広告、竈の賑ひ・徳用食鏡)。③序:天保4年9月、高井蘭山。④内題:「経済をしへ草」。⑤本文:92項目(下記)。⑥刊記:刊行年月無し、江戸書肆12軒。

—著者は大蔵永常らしい(注2)。本文は野生草木の可食部・調理法・能毒。挙げているのは、椎実・ドングリ実・葛・百合・アザミ・スギナ・イタドリなど、92品。草木図は無い。内容的には、以下の(2)~(4)と重複しない。

(2) 『竈の賑ひ』

①刷題箋題:「[日用助食] 竈の賑ひ」。②見返題:「[日用助食] 竈賑」(広告、飢食教草・徳用食鏡)。③内題:「竈の賑ひ、大蔵永常編」。④序:筆者名・年記無し。⑤目録。⑥本文:24項目(下記)。⑦刊記:刊行年月無し、江戸書肆5軒。

—本書は年記が無いが、天保4年刊と思われる(注3)。本文は、「^{きらぎ}雪花菜飯焚法」(雪花菜、つまり「おから」の飯)から始まって、唐なす・里芋・薩摩芋・大根などの飯・粥の作り方、茶粥・大根葉飯・団子汁・麦飯の作り方等々。「灰葛と雪花菜の団子」では、「此葛の掘方製法晒様、つるを刈て葛布の仕やうを、予が著したる製葛録に委しく記す」などと、この項で3回にわたって自著『製葛録』(天保元年・1830刊)に言及して、宣伝している。

(3) 『徳用食鏡』(徳用食鑑)

①刷題箋題:「徳用食鏡」。②見返題:「徳用食鏡」(広告、無し)。③序:天保4年10月、礪洲陳人清巡(清水礪洲か)。④内題:「徳用食鏡」。⑤序:「惣論、大蔵永常編」。⑥目録。⑦本文:22項目(下記)。⑧跋:筆者名・年記無し。⑨刊記:刊行年月無し、江戸書肆13軒。

——惣論に「前に、竈の賑ひと題し……」とあるので、『竈の賑ひ』は本書以前の出版。本文の内容は『竈の賑ひ』と似ているが、同一項目は無い。本書は「小米の飯焚様」「同粥」「同団子」「小米味噌拵様」から始まり、ヒジキ飯やアラメ飯、粟飯、粟粥を取り上げ、「肥前船頭飯」「豊後黄飯」「若狭の白粥」「畿内の五文餅」など、地方食的なものを多く挙げる。跋に、本書に記したのは「御府内ニて用べき為にするしたれば、田家にてすべき飢食にハあらず」と、都会向けの救荒書だと明記している。

(4) 『都鄙安逸伝』

- ①刷題箋題：「[万家至宝] 都鄙安逸伝」。②見返：白紙。③序：天保4年11月、筆者名無し。④内題：「都鄙安逸伝」（著者名、無し）。⑤本文：31項目（下記）。⑥跋：題は「総論」、筆者名・年記無し。⑦刊記：無し。

——刊記が無く、板元は何処にも記されていない。ただ、序中に「石倉堂主人、一夕懐小冊子而来、乞一言閱之……」とあり、この石倉堂が板元だろう。本文は、「雪花菜飯焚法」から始まり、「田植饅頭製方」で終わる31項目だが、前半の19項目は『竈の賑ひ』から、後半の12項目は『徳用食鏡』から抜き出したものである。ただし、版木は新たに彫り、挿絵を暁鐘成の画に差し換え、文章を多少改め、用語も手直ししている。たとえば、『竈の賑ひ』ではカボチャに対して江戸の呼称「唐なす」を使っているが、それを「南京」と関西での通用名に変えている。また、省かれている項目は関西地方で周知のものが多く、たとえば、『竈の賑ひ』にある「大和国揚茶粥」「摂津国在にて会するおみ焚様」は本書に採用せず、『徳用食鏡』にある地方食的な4項目「肥前船頭飯、豊後黄飯、若狭の白粥、畿内の五文餅」のうち、本書では最後の1項目を落している。

じつは、石倉堂は大坂心齋橋の本屋河内屋長兵衛で、他ならぬ大蔵永常著『製葛録』と『農稼業事』の板元である（注4）。したがって、本書は大坂で出版されたわけで、江戸で出版された『竈の賑ひ』と『徳用食鏡』のうち、関西では馴染みの料理を省き、食品名も関西式に変え、文にも手を入れて刊行したのであろう（注5）。なお、『竈の賑ひ』で『製葛録』に触れた前述の3箇所もそのままにして、その宣伝を兼ねているように受け取れる。

気になることがある。まず第一に著者名が明記されておらず、刊記も欠けていること。第二に、『享保以後大阪出版書籍目録』（注6）には本書の記載が無く、無届と思われること。江戸の板元とのトラブルを恐れたのであろうか。

（注1） 天保4年の飢饉は、「東海道の六分五厘作を最良とし、奥羽二州の平均は三分五厘二毛」。より悲惨な第2波は天保7年に襲い、このときは、「山陽・南海の五分五厘作を最良とし、山陰・関東は三分二厘作内外、陸奥は二分八厘作にて、無収穫に終れるあり」（日本凶荒史考）。

（注2） 『国書総目録』は『飢食教草』の序を記した高井蘭山を著者とするが、序には「書肆、経済をしへ草の一書を寿梓せんとす。そのはじめに一筆影せよと乞れ……」とあって、高井が著者とは思えない。一方、①永常著『徳用食鏡』の総論と跋に「飢食教草に委

し」と、自著らしい言い回しをしている、②『麩食教草』の見返しには『竈の賑ひ』と『徳用食鏡』を並べて宣伝していて、後者の説明には「此書ハ麩食教草ならびにかまどの賑ひ等に漏たる分をあつめたるもの也」とある、③『竈の賑ひ』の見返しには『麩食教草』と『徳用食鏡』を広告する。この3点は、『麩食教草』の著者が大蔵永常であることを強く示唆している。

- (注3) 『竈の賑ひ』は刊記にも序にも年記が無いが、見返しに『麩食教草』(天保4年9月序)と『徳用食鏡』(同年10月序)の宣伝が入っていること、序に東北の凶作だけを挙げている(注1参照)ことから、天保4年の刊行らしい。『徳用食鏡』の「惣論」によると、『徳用食鏡』以前の出版。
- (注4) 井上隆明,『[改訂増補]近世書林板元総覧』,日本書誌学大系76,青裳堂書店,1998年。矢島玄亮,『徳川時代出版者出版物集覧』,同刊行会,1976年。
- (注5) 『都鄙安逸伝』には『[大平恩沢]飯百珍伝』と改題した後刷本があるというが、未見。
- (注6) 『享保以後大阪出版書籍目録』,清文堂出版,1964年。[1936年刊初版の復刻]

6 『本草要正』:異色の動植物名辞典

江戸時代には動植物について多数の漢和・和漢名辞典が作られたが、みな大同小異と評せるなかに、異色な1点がある。幕臣泉本儀^{いづもと}左衛門幸直(注1)が編纂した『本草要正』(国会図書館,特1-3426)がそれである。用紙の版心に「泉本蔵」と刷られているので稿本であり、原本は13冊だったらしい。残念ながら、現存するのは8冊(注2)にすぎないが、それでも参考価値のある書物といえる。

構成は序・凡例・本文の順で、序は文久2年(1862)5月に幕医佐合養庵(注3)が記している。本文は、まず草・木・虫・介……獣など類別に分け、ついで各類とも漢名と和名を頭音(第1字目の発音)のイロハ順に配列し、漢名には対応する和名を、和名には対応する漢名を挙げる。イロハ……の各部は前半が漢和辞典・後半が和漢辞典になっている。なお、たとえば「ラン」の項にはニシキランやカモメランのように「〇〇ラン」の類、「セミ」には〇〇セミのほかにはヒグラシやミンミンのような類品も集める。また、時に異名や方言も記す。

さて、本書には他本に無い特徴が2点ある。第一は、和名をすべて発音どおりの表記にしたことで、たとえば「メウガ」(茗荷)を「ミョオガ」、「テフ」(蝶)を「チョオ」と記す。これは言語学にとって当時の発音資料となるだろう。面白いことに、「大」はオホ、「青」はアラ、「火」と「花」はクワ、「鬼」はヲニと記しており、現在とはまだ多少発音に差があったように思える。

第二は、園芸品に品種名・花銘を数多く挙げること。以下にその例を挙げておく。ただし、ここでは品名に現和名表記を用い、下位分類があるものは、右欄に示してある。

ハス	49品	花替のみ
マツバラシ	31品	葉替12, シシ [獅子] 部6, チリメン部13
ヤブコウジ	15品	葉替のみ

フクジュソウ	131品	紅花9, 白花15, 八重咲10, 段咲8, 大輪17, 細咲糸咲11, 青軸打抜8, 絞り8, 変化類17, ^{なでしこ} 瞿麦咲8, 葉替11, 奇品9
アサガオ	130品	葉替56, 花替46, ^{しぼり} 花絞14, 色替14
アンジャベル	16品	花替のみ [カーネーションの類]
ツバキ	237品	葉替13, 花替224
ツツジ	159品	花替のみ
サクラ	167品	花替のみ
サザンカ	66品	葉替6, 花替60
サツキ	142品	花替のみ
ヒバ	16品	葉替のみ
モミジ	59品	葉替のみ

もっとも、すべての園芸品に品種・花銘が挙げてあるのではなく、イワヒバ、ニシキラン、キク、モモなどには何も記されていない。その違いが著者の好みを反映しているのか、今後書き入れる予定だったのかはわからない。

園芸品については、形状や渡来年代について注記を加えることも稀ではなく、これも良い資料となる。以下に、錦蘭(注4)に関係する2例を示しておく。

「カモメラン [鷗蘭=錦蘭], 別名ウグイスラン——豆州房州ノ産。葉形, ビロオドランニ似テ青シ。葉表, 白ニシテ, 亀甲ノ如キ筋, 白クアリ。五六月頃, 花茎立登リテ, 五六輪カモメノ鳥ノ飛シ形ニシテ, 至テ小輪。近年八丈嶋三宅【嶋】ヨリ来ル草, 亀甲筋アルモアリ, 又ナキモアリ。又ビロオドランノ如キニシテ, 葉青ク中心白キ堅筋アルモアリ」

「ビロオドラン——豆州房州ノ産。葉形, ウグイスラン又^{チヨウジ}丁子カツランニ似テ, 鼠色。^{ビロード}天鷲絨ノ如ク, 亀甲筋白ク, 四五月頃花茎出テ四五輪ツク花, 薄色ニシテ, スコシカモメノ形ノ花開ク。近年八丈三宅嶋ヨリ来ル花白シ, 光沢ナン。豆州ノ産, コノウエナク上品也」

(注1) 泉本儀左衛門幸直は『[草木育方秘伝] 錦毛類』2巻という園芸植物の栽培書(元治元年=1864年序, 筆写本)も記しており, 園芸に詳しくあったらしい。生没年や身分など, 詳細は不明。

(注2) 現存するのは, 草類4冊(本来は6冊), 木類2冊(本来は3冊)・虫類1冊, 介類・獸類合1冊。欠けているのは, 草類がチ〜タ部とエ〜ス部の計2冊, 木類がネ〜ア部の1冊, および魚類と禽類各1冊。

(注3) 佐合養庵の生没年や経歴など, 一切不明。養庵は, 注1に挙げた泉本儀左衛門著『錦毛類』の序も記しており, 両者はかなり親しかったようである。

(注4) 錦蘭・ビロード蘭については → 磯野直秀, 日本博物学史覚え書IX, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 28号, 60-81, 2000年。[該当するのは, 第2節]

7 『啓蒙志』と『東産腊葉写』

中味がわからない資料を図書館で請求してみると10回か20回に1回くらいは面白いものに出会えるが、この『啓蒙志』（国会図書館蔵，特1-2172，1冊）もその一つだった。目録には著者名も記されておらず，書名からは内容もまったく見当がつかない。ところが，閲覧してみると，丹波亀山藩士矢部致知（注1）の自筆本で，矢部のやはり自筆本である『東産腊葉写』（国会図書館，特1-1734，1冊）と対になる著作と判明した。

矢部は文政元年（1818）の初めには江戸に居り，同年3月28日に博物家岩崎灌園に入門した（注2）。亀山藩の江戸詰城代松平帯刀芝陽の紹介であった。芝陽は博物誌に関心が深かった人物で，幕医栗本丹洲および蘭学者大槻玄沢と非常に親しく，玄沢の編になる『蘭畹摘芳』には芝陽の著作が数編収められている（注3）。推察だが，芝陽は矢部を丹洲にも引き合せていたようである。

灌園に入門した矢部は，本格的に本草を学ぼうとしたらしく，灌園から『救荒本草』の講義を受け始めた。だが，運が悪いことに，間もなく亀山へ戻ることになった。そこで矢部は，丹洲がウェインマンの『花譜』などヨーロッパの草木図譜の図を転写して編集した書物（現書名『洋名入草木図』，東博蔵）を継写して，文政元年7月に『[丹洲先生]物印満写生略』を作る。ついで8月には，灌園と丹洲の二人からそれぞれ漢書『救荒本草』を借り，両先達はその本に書き込んだ所説や注記を写し取って，『[丹洲先生・灌園先生]救荒本草説弁抄』としてまとめた。いずれも，亀山に戻ってから役立てるためであった。

矢部は在府中，江戸の本草家・博物家・植木屋などと交わり，それぞれの庭園にも出入りし，腊葉標本や写生画譜なども見せてもらっていた。『啓蒙志』はその折の覚え書である。また，腊葉標本（押葉）も作っており，『東産腊葉写』はその標本を写生したもの。江戸滞在中の観察・採集記録という点で，この2書は対になる。

『東産腊葉写』は文政3年（1820）4月に京都で書き終えたとの後書と「矢部氏蔵書」の印をもつ自筆本である（注4）。序や跋は無く，腊葉をもとにした墨図（花などを書き足していることも少なくない）ばかり214点。図は正確で，品名のほか，短い注記を添えることもある。つねに「岩崎園栽」「芝陽盆栽」「武州中野村林中」のように出所を明記しているが，日付は無い。人名を記したものは，斎田75がもっとも多く，岩崎26，芝陽19，栗本6，設楽4……の順である。『啓蒙志』の記載から，斎田は植木師群芳園斎田弥三郎らしい。岩崎は岩崎灌園，芝陽は上司の松平帯刀芝陽，栗本は栗本丹洲，設楽は設楽妍芳（幕臣で，赭鞭会の一員→注3報文）。一方採集地名を挙げた図では，鼠山（現JR山手線目白駅の西）の12回がトップで，巢鴨・道灌山（上野北方の台地）・大宮（大宮八幡宮，現杉並区）がいずれも6回，井ノ頭・十二社（新宿の角筈）が5回，番町官園・中野・本庄・於久野（屋久，田端の北）が3回……と分散しており，江戸の周辺を広く歩き回ったとわかる。鼠山・道灌山・大宮八幡宮などは，江戸の博物家が好んだ採集地であったが，江戸での採集草木図で地名を明記した例は意外に少ない。『東産腊葉写』の所収点数はそう多くはないが，それでも有用な資料となろう。

『啓蒙志』は「文政元戊寅記之 東都諸家見聞即記 矢部氏致知」の奥書をもつ。印は無い

が、筆跡が『東産腊葉写』と同一で、やはり自筆本である。方々の家園の草木や薬品会出品物のスケッチ、諸家の所蔵図や腊葉の転写、諸家からの聞き書……と、覚え書なので各種の記録が混ざって記され、字も読みにくい場合が少なからずあるし、図も雑な図あり精密図あり、動物もあり石もありという具合である。本書の図数は約390で、うち植物が約370（『東産腊葉写』と重複した図はほとんど無い）。このほかに、図が無く、形状や花期などを記した文だけのものが数百条ある。図や文には、誰の庭園で見た品か、誰から聞いた話かが示されている。

ただ、人名を「岩崎」「齋田」「群芳園」「芝陽（先生）」のように姓や号をきちんと記した例は数えるほどしかなく、大多数は「イ」「ク」「サ」「クリ」「芝」「設」など略号で示している。『東産腊葉写』の記載氏名・記載品名を考慮すると、「イ」は岩崎、「サ」は齋田、「ク」「クリ」は栗本、「芝」は芝陽、「設」は設楽と思われる（注5）。図の有無にかかわらず、すべての記録を対象として姓・号・略号の出現回数を併せると、岩崎灌園の名は119回登場し、齋田群芳園弥三郎が93回、栗本丹洲が81回、松平芝陽が40回、設楽妍芳が36回となって、江戸滞在中の矢部致知が、これらの人々と殊に親しくしていたことがわかる。

『啓蒙志』の記録に時々残されている年月日から判断すると、矢部致知が江戸に居たのは文政元年の8月末くらいまでだったらしい。この前年の日付の記事は見付からないから、矢部の在府は1年弱だろう。その短いあいだに『啓蒙志』と『東産腊葉写』の2点のほか、冒頭で記した『[丹洲先生]物印満写生略』と『[丹洲先生・灌園先生]救荒本草説弁抄』の2書を残した。画は旨いし、整理の仕方も的確、文も簡潔でわかりやすい。将来の活動が楽しみな人材だったが、丹波亀山藩に戻ってからの博物誌的著作は無いようである。

〔注1〕 矢部^{むねとも}致知は安永元年（1772）に亀山藩士近藤家に生まれ、のち矢部家を継ぐ。名は致知、通称節雄・八郎兵衛、号朴斎・節斎ほか。普請奉行・大目付・桜田門御番所番頭代を歴任、学問所世話頭・学校御用掛・旧記懸も勤めた。嘉永3年（1850）3月18日没、年79。

〔注2〕 岩崎灌園著、『入門控帳』、国会図書館蔵。

〔注3〕 磯野直秀・中村禎里、実在しなかった本草家：設楽芝陽、科学医学資料研究、264号、1-7、1996年。

〔注4〕 腊葉は紙に貼り付けて保存していたらしいが、腊葉は壊れやすいので、別に写生図を作ったのだろう。

〔注5〕 赤センダンのほぼ同じ図に『啓蒙志』では「サ」、『東産腊葉写』では「齋田盆栽」とあるほか、幾つかの品名で同様の関係が認められる。したがって、「サ」は齋田と考えられる。一方、『啓蒙志』では松葉ナデシコに「ク」とあるが、『東産腊葉写』では「栗本園栽」とある。また、『啓蒙志』にある「潜竜鯊」の絵（薬品会でのスケッチらしい）に「ク蔵」とあるが、これはチョウザメ。当時この種の鮫図をもっとも多く所持していたのは栗本丹洲だった。したがって、「ク」は栗本。ほかに「ノ」が39回出るが、これは橋保国画の刊本『絵本野山草』からの写しと明記されている。

8 『本草問答録』

これも前節と同じような次第で、意外な資料に出会った例である。『本草問答録』（国会図書館蔵、特7-514、1冊）は曲直瀬正貞の自筆本で、問答の質問者はその正貞。一方、回答者は大垣の江馬春齡。これは予想外の組み合わせだった。

曲直瀬正貞（1809～58）は医者の名門養安院家の生まれで、幕府の医官。正貞は名、字子幹、号篁庵・楓簷、医号養安院。奥詔医師で、嘉永3年（1850）に法眼になった。いろいろな資料にその名がしばしば登場するので、江戸の医師や本草家、博物家と広く交流していたことが明らかである。

一方、江馬家は代々春齡を名乗ったが、問答に登場する江戸の人々の名から見て、これは4代春齡の江馬活堂（1806～91）に間違いない。大垣藩医で、山本亡羊に本草を学ぶ。名は元益、通称春齡、号藤渠・活堂・万春。活堂は天保14年（1843）6月6日に郷里大垣を離れて、同月16日江戸に着き、弘化2年（1845）10月1日まで、2年あまり江戸に滞在した。

この江戸滞在中の活堂の日記『東海紀行』（注1）によると、活堂は弘化元年（1844）7月24日から同年12月までのあいだに、幕医小島宝素（尚質、春庵）の紹介で曲直瀬正貞に会っており、次のように記している――

「官医曲直瀬養安院君ハ物産家也。余、小島君ヲ介トシテ至リ謁シ、物産ヲ談ズ。其論ゼラルル所、余ト能ク合ヘリ。江戸ノ物産家、各々自己ノ説ヲ主張シ、蘭山翁ノ説ト雖ドモ^{イニ}妄ニ排スル人多シ。君独リ謙遜、能ク外人〔他人〕ノ説ヲ容レ、又先哲ノ軌轍〔道〕ニ從ハル。且ツ、草木ヲ養ハルルコト饒多〔とても多い〕也。余、以為ク、江戸物産家ノ巨擘〔巨才〕ナリ。君、物品識名〔水谷豊文ノ著作〕ニ出ル品ヲ^{コトゴト}尽ク^{アツ}聚メント要セラル。余モ嘗テ其望アルヲ以テ、互ニ探索発明スル品ヲ示シ、討論シテ大益ヲ得タリ」

このように、活堂は正貞をとっても高く評価していた。残念ながら、問答の件は『東海紀行』には記されていないが、引用文の最後に出る「討論」の延長上にあったと考えて良いだろう。

さて、本書は大きく、3部に分かれている。第1部は草木103品が和名のイロハ順に配列され、それぞれに正貞の質問・活堂の返答・正貞の再筆（「又云」で始まり、見解や要望、再質問を記す）が記されている。返答だけが朱筆で、質問とは別の筆跡。

第2部は冒頭に「拾遺之部」とあり、第1部とまったく同じ形式で草木186品がイロハ順に並べられ、問答が記されている。

第3部は問答とは無関係で、さまざまなことが乱雑に記されており、正貞の覚え書と思われる。そして稿末に「内直医官兼薬局督務医学教諭法眼曲直瀬貞誌」とある。

結局、第1部・第2部併せて計289品の草木について問答が交わされたことになる。その例を、次に挙げる。（ ）内は正貞が記している別名である。

①正貞：イワキンバイ（イハイチゴ）、形状如何。

活堂：江戸蛇含ノ一種、或狼牙一種トスルモノ。資生君・楽圃君ニアリ。拙図アリ。

正貞：又云、ツルキンバイニヤ。……生葉ヲ呈ス、是ニヤ。

②正貞：ヤマドウシン（カナウツギ），形状如何。

活堂：薬品会ニ吉三郎出ス所ノコンデルキ也。按ニ土常山ノ一種，細葉ノモノナリ。

正貞：又云，伏。[伏=同意]

③正貞：トキサウ，朱蘭，形状如何。

活堂：亡羊 [山本亡羊] 曰，朱蘭 <ヲ克蘭> 一種。美濃荒尾ノ野，金生山等ニ多シ。サギサウハ白ク，此花ハ紅ナリ。故ニトキサウト名ク。拙図アリ。

正貞：又云，他日，一根ヲ乞。

④正貞：ミヤマシグレ，深山陰地に生。高一二尺，形クマノミヅキニ似テ，小紅花ヲヒラク。

活堂：富山侯ニアリ。又，吉三郎，薬品会ニ出セルモノヲ，ミヤマシグレナリト云。

正貞：[省略]

上記の応答のように，曲直瀬正貞が第1部・第2部の個所に質問を記して江馬活堂に渡し，活堂がそれに朱筆で返答を書いて正貞に戻した。その問答のなかに，「御帰郷ノ上，実ヲ乞」と分与を願っていること，活堂はそれらの懇望に対して「帰国ノ後，呈スベシ」のように答えているので，正貞→活堂→正貞の冊子受け渡しは，活堂の江戸滞在中に行われたことは間違いなく，それも活堂が帰郷した弘化2年の可能性が高い（注2）。ただ，正貞の再質問に対しては回答がまったく無いので，正貞は再質問を記入したものの，なんらかの理由があって活堂には冊子を渡さずに終わったと思われる。

上の引用例からもわかるが，活堂の返答中には「○○氏の園にある」式の叙述が多く，それから江戸滞在時に交流していた人物の名がわかる。それをまとめると，当事者の曲直瀬養安院正貞は別として，富山侯（万香亭，前田利保），福岡侯（楽善亭，黒田斉清），岸和田侯（岡部長慎），資生圃（馬場大助），楽圃（飯室庄左衛門），四季園（佐橋兵三郎），土屋弥学（詳細不明，注3），植木屋吉三郎（柏木義党・富潤，注4）など。吉三郎以外は『東海紀行』に出る名でもあるから，とくに新味は無いが，それぞれの草木園に出入りしていたほど親しくなっていたとは言えよう。また，正貞の文を見ると，正貞は京都の山本亡羊や名古屋の伊藤圭介と交流していて，時々草木を送ってもらっていたらしい。

（注1）『東海紀行』は活堂の『藤渠漫筆』巻9に所収されている。この資料を提供して下さった平野 満明治大学教授に御礼を申し上げる。

（注2）返答のなかで活堂が「資生圃ニ昨年マデアリ」と記している箇所があるが，活堂は天保14年から弘化2年までの足かけ3年しか江戸に居なかった。この文は「昨年は見たし，その前にも見たが，今年は知らない」と解せるから，今年=弘化2年となる。

（注3）『東海紀行』から，馬場大助の物産会に加わっていた人物とわかるが，幕医ではない。

（注4）平野 恵，植木屋柏木吉三郎の本草学上の業績，MUSEUM，577号，2002年。

9 幕末までの珍鳥奇魚捕獲記録

本草書や博物図譜には、珍鳥や奇獣奇魚の出現記録がいろいろと含まれている。そのなかにはペリカンやワニのように迷いこんできた珍品もいるし、アシカやマンボウ、アホウドリなど、けっして稀少ではなかったが一般の人々には縁遠い存在だったので記事が残された種類もある。ただ、山のようにある資料のあちこちに分散して記録されているので、なかなか目につきにくい。そこで、これまで私が出会った記録を集めてみた。

以下、年次順に記録を挙げるが、いずれも特徴を示す写生図あるいは記載があって、種類の推定が可能な場合に限っている。ただし、図が残っていても下手な写生だったり、転写を重ねて色彩や形状が信用しにくかったりして、厳密な同定は不可能に近い(注1)。したがって、アザラシやペリカン、チョウザメなどは、類名を挙げるにとどめた。また、紙数の関係で記事の内容は要点しか記していない。

年月日 (○は閏月)	現和名	捕獲地など (文献; 数字は巻数)
永享2年 (1430) ⑪月28日	ペリカン	舟津の漁師が京都に持参 (看聞御記)
正保3年 (1646) 2月4日	マンボウ	深川の漁夫が江戸城に献上 (徳川実記)
〃 4年 (1647) 4月2日	アカマンボウ	房州の漁夫が江戸城に献上 (徳川実記)
〃 4年 (1647) 5月3日	アシカ	葛西の漁夫が江戸城に献上 (徳川実記)
承応3年 (1654) 9月5日	ペリカン	盛岡藩の郡山で撃ち落す (盛岡藩雑書)
明暦2年 (1656)	ジャコウネズミ	ジャガタラから長崎に渡来, 定着 (長崎年暦両面鏡)
寛文7年 (1667) 2月7日	ソデグロヅル	狩野探幽が羽などを写生 (探幽縮図)
延宝3年 (1675) 6月19日	オガサワラオオコウモリ・ハシブトゴイ・オガサワラマシコ	幕府の探険隊が無人島 (小笠原諸島) から持ち帰る (通航一覧附録)
天和1年 (1681) 9月11日	ペリカン	花巻の人が盛岡藩に献上 (盛岡藩雑書)
元禄11年 (1698) 6月27日	ダイオウイカ	房州勝山で捕獲 (甘露叢)
宝永1年 (1704) 6月	レンカク	駿府浅畑で捕獲 (博物館禽譜, 百品考)
〃 6年 (1709) 4月5日	マンボウ	摂州大石村で捕獲 (魚鳥写生図)
正徳2年 (1712) 3月5日	アシカ	備前福谷 (岡山の東) で撃ち取る (備陽記)
〃 4年 (1714) 3月27日	マンボウ	紀伊出嶋 (和歌川河口) で捕獲 (九淵遺珠)
享保1年 (1716) 冬	ペリカン	堺の今地に2羽が飛来 (月堂見聞集)
〃 9年 (1724) 2月10日	マンボウ	土佐十市沖で捕獲 (魚鳥写生図)
〃 10年 (1725) 10月1日	ペリカン	常陸国土浦で捕獲, 幕府に献上 (享保世話)
〃 14年 (1729) 12月10日	シマフクロウ	松前藩主が幕府へ2羽献上 (松前年々記, 堀田禽譜)
〃 15年 (1730) 春	ダイオウイカ	相州江ノ島で捕獲 (諸国里人談)
〃 16年 (1731) 9月	ペリカン	松前の馬口石で捕獲 (松前志)
〃 17年 (1732) 4月5日	マンボウ	伊勢国桑名沖で捕獲 (魚鳥写生図)
〃 17年 (1732) 5月22日	アカマンボウ	房州沖で捕獲し, 江戸に来る (随観写真)
元文5年 (1740) 11月11日	サケイ	仙台城近くで捕獲 (増補庶物類纂)
寛保3年 (1743) 11月	タイマイ	加賀国宮腰浦で捕獲 (本草綱目啓蒙)

延享1年(1744)10月	イリエワニ?	薩州硫黄島沖で捕獲, 藩に献上(本草綱目纂疏, 龍絵巻物)
寛延1年(1748)4月2日	アシカ	越後糸魚川の浦浜で捕獲(越後名寄)
〃 1年(1748)5月中旬	アシカ	越後出雲崎の北へ打ち上る(越後名寄)
〃 2年(1749)3月29日	マンボウ	讃岐国香西沖で捕獲(泰平年表)
宝暦3年(1753)1月	チョウザメ?	土佐の安芸浦で捕獲(日本博物学年表)
〃 4年(1754)2月中旬	アシカ	越後の寺泊浦に打ち寄せられる(越後名寄)
〃 12年(1762)4月18日	マンボウ	武蔵国羽田で捕獲(見世物研究)
〃 13年(1763)3月6日	マンボウ	江戸品川沖で捕獲(宝暦現来集)
明和1年(1764)12月18日	クロトキ	将軍家治, 小松川で2羽を獲る。『徳川実記』でクロトキの初記録。以後, 多出
〃 2年(1765)7月22日	ハクビシン?	相模大田で雷雨後に捕えた雷獣(震雷記)
〃 2年(1765)	マンボウ	江戸芝浦で捕獲(武江年表)
安永8年(1779)9月	チョウザメ	阿波国名東郡津田浦で捕獲(異魚図纂)
天明4年(1784)冬	チョウザメ	下総国の利根川で網にかかる(兼葭堂雜録)
〃 6年(1786)以前	サケイ	将軍家治の治世(1760~本年)の間に献上される(観文禽譜, 堀田禽譜)
寛政3年(1791)6月	アカマンボウ	房州で捕獲(奇品図会)
〃 7年(1795)10月	シラガホオジロ	大坂で捕獲?(嶋ほふじろ; 堀田禽譜)
〃 7年(1795)12月?	シロフクロウ	摂津國中浜村で捕獲(堀田禽譜, 桃洞遺筆)
〃 9年(1797)9月9日	マンボウ	佐渡姫津で捕獲(翻車考)
〃 11年(1799)冬	ホッキョクグマ?	白熊を蝦夷から江戸に送る(東夷物産志稿)
〃 12年(1800)2月	イリエワニ	奄美大島で捕獲(島津家旧蔵動物写生図)
〃 12年(1800)5月28日	リュウグウノツカイ	肥前国唐沢姉子の灘で捕獲(写生物類品図)
〃 12年(1800)夏	リュウグウノツカイ	出雲国日ノ御崎で捕獲(写生物類品図)
享和1年(1801)6月12日	オオサンショウウオ	江戸板橋水車の堰下で捕獲(武江年表)
〃 2年(1802)3月18日	フリソデウオ	和歌山南方の小浦で採る(桃洞遺筆)
〃 3年(1803)4月27日	オサガメ	備前国児島で捕獲(日本博物学年表)
文化2年(1805)5月16日	マンボウ	下総国船橋の漁師が捕獲(巷街贅説)
〃 4年(1807)11月27日	アシカ	江戸高輪沖で捕獲(泰平年表, 谷津1940)
〃 5年(1808)5月6日	オサガメ	能登半島の風戸浦で捕獲(三州山海異品)
〃 6年(1809)4月	ツノメドリ	尾張の熱田沖で捕獲(水谷禽譜)
〃 12年(1815)8月26日	ベリカン	豊後国海部郡で撃つ(堀田禽譜)
文政3年(1820)夏	ベリカン	阿波国那賀郡庄村に飛来, 望遠鏡で数日間観察(重修本草綱目啓蒙・増補事項)
〃 5年(1822)10月	カンムリツクシガモ	箱館亀田村近辺で雌雄を捕獲し, 翌年将軍に献上(堀田禽譜)
〃 9年(1826)秋	ベリカン	紀州紀ノ川河口に雌雄が出現(紀南六郡志)
〃 10年(1827)6月	カブトガニ	尾張国知多郡で捕獲, 名古屋で見世物(猿猴庵文政日記)
〃 11年(1828)2月	アホウドリ	石見国浜田で捕獲(視聽草統集3)
天保1年(1830)3月19日	アシカ	長崎港内で銃撃(図録: 日本博物学史始)
〃 2年(1831)1月18日	リュウグウノツカイ	筑前国西浦で得る(異魚図纂)
〃 2年(1831)7月6日	リュウグウノツカイ	土佐国幡多郡小才角に2匹漂着(栗氏魚譜)
〃 3年(1832)1月	アシカ	平戸の釜田浦横嶋で捕獲(甲子夜話統77)
〃 3年(1832)5月6日	アホウドリ	江戸小石川馬場に落ちる(梅園禽譜)
〃 3年(1832)	オオサンショウウオ	京都二条城の堀で発見(日本産物志・美濃)
〃 4年(1833)7月2日	アザラシ	尾張熱田で捕獲, 見世物となる(名陽見聞図会)

〃 7年 (1836) 4月	アザラン	尾張熱田で捕獲 (名陽見聞図会)
〃 9年 (1838) 6月17日	アザラン	相模国辻堂に2匹出現, 捕えて将軍の上覧後に両国で見世物 (泰平年表, 海獣考)
〃 10年 (1839) 5月	ジャコウネズミ?	京都で捕獲, 部屋に香気が漂う (随意雑識)
〃 11年 (1840) 10月22日	ダイオウイカ	上総国金谷沖で捕獲 (天保雑記35)
〃 12年 (1841) 春	オオサンショウウオ	江戸城の堀さらいで捕獲, 普請後に堀へ戻す (皇代系譜)
〃 13年 (1842) 2月	チョウザメ	土佐国秋浦で捕獲 (紫藤園海鯊図)
〃 13年 (1842) 7月初旬	ハクビシン?	周防国富田村で捕獲 (皇代系譜)
弘化1年 (1844) 12月	ノガン	尾張田楽村で若鳥を捕獲 (錦窠禽譜4)
嘉永5年 (1852) 4月24日	エトロフウミスズメ	京都?の吉田村で捕獲 (本草写生図譜)
〃 6年 (1853) 5月3日	ダイオウイカ	上総国金谷で捕獲, 江戸で見世物 (藤岡屋日記)
安政2年 (1855) 7月5日	チョウザメ	筑後川河口付近で捕獲 (本草写生図譜)
〃 2年 (1855) 9月	チョウザメ	丹後国田辺で捕獲 (本草写生図譜)
〃 3年 (1856) 4月19日	マンボウ	備前国児島郡阿津村沖 (日本博物学年表)
万延1年 (1860) 4月1日	セイウチ	蝦夷川汲の浜に漂着 (写生物類品図)
文久2年 (1862) 8月	ペリカン	尾張国勢田の桜新田で捕獲 (ガランテウ図)
元治1年 (1864) 11月24日	ソデグロゾル	江戸日本堤での写生図がある (遊覧記)
慶応1年 (1865) 5月15日	クロトキ	武蔵国野田での写生図がある (遊覧記)

[出典]: 五十音順。『国書総目録』で所在が探せる資料や、翻刻本・影印本のあるものは省略した。

魚鳥写生図, 著者未詳, 国会図書館蔵, 特1-3264。

島津家旧蔵動物写生図, 編者未詳, 山階鳥類研究所蔵。

写生物類品図, 編者未詳, 国会図書館蔵, 別10-43

図録: 日本博物学事始, サントリー美術館, 1987年。

堀田禽譜, 堀田正敦編, 東京国立博物館蔵: 登録書名は『禽譜』(数編に分かれている)。

谷津直秀, 隠れた博物学者亀協従, 植物及動物, 8, 1207-09, 1940年。

遊覧記, 松森胤保著。→ 磯野直秀・内田康夫, 『遊覧記』に見られる江戸の鳥類, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 7号, 1-17, 1989年。

栗氏魚譜, 栗本丹洲著, 国会図書館蔵, 別11-31

龍絵巻物, 栗本丹洲著, 国立科学博物館蔵。

さすがに、大きな袋という特徴があるペリカンは10件も記録がある。その多くが8・9月前後の記録なのは、台風に運ばれてきたからか。

マンボウも12回と多い。個体数は少なくない魚だが、大型で異様な姿をして目立つし、漁民以外には珍しい存在だったからだろう。なお、理由は不明だが、大半の記録は2～5月である。

件数はさほど多くないが、アシカの記録も見える。当時は日本中にアシカの群生地があった(注2)。銚子や紀伊をはじめ各地で「アシカ島」などと呼ばれた群生地の近辺では有りふれた存在だったのだろうが、それ以外の場所ではやはり珍獣として記録に残ったのだろう。とりわけ、正徳2年(1712)の記録は、瀬戸内海での数少ないアシカ記録の一つとして意味がある。

また、天保年間の中頃には、尾張や相模でアザランの記録が連続している。そのやや後の天保13年には、土佐でチョウザメが捕えられている。これらの記録はいわゆる「寛政～天保小氷期」のためかもしれない。北方系動物がかなり南の地域で捕獲された事例はほかにも点在しており、より多くの例が集まれば、地球寒冷化との関連性もはっきりすると思う。

ここに挙げた記録は断片的なもので、まだ埋もれている資料が数多くあるにちがいない。これに類する記録を御存じの方は、御一報いただければ幸いです。

(注1) 転写が重ねられると、形が崩れるほか、特徴が強調されるからであろう、だんだん色が濃くなり、紋様のはっきりしてくることが多い。斑点の数が増えたり、逆に減ったりすることもある。また、脚の黒色や茶色が泥のためだったりする。絵具の変色もある。こういうことを考えると、昔の絵図からあまり細かく同定するのは意味がないし、かえって誤りを犯す恐れさえあると思う。

(注2) 中村一恵, ニホンアシカ: その分布と絶滅をめぐる, 日本の生物, 3 (12), 27-34, 1989年。

【訂正】

「日本博物学史覚え書 V」(本誌, 21号, 1997年)

p. 62, 下から11行目: 鶺鴒 → 鶺鴒

同頁, 同行: かつては……だろうか → 削除

「日本博物学史覚え書 IX」(本誌, 28号, 2000年)

p. 61, 上から15行目: 「……番町御堀端」の後に, 「・代官町・市ヶ谷まんちう谷(俗くらやみ坂といふ)・浅草反甫・日光道大門宿より西□□・辻村辺」を追加。

「日本博物学史覚え書 XI」(本誌, 30号, 2001年)

p. 25, (注3): 『土佐群書類従』巻80 → 『家老月番記録』

p. 29, (注4): 「1937年……不明」すなわち出典不明と記したが, それが「あさかは農久会会誌, 49号, 1-11, 1937年」であることを, 渡辺好孝氏が知らせて下さった。

p. 37, 下から10行目: 安政3年 → 安永3年

p. 43, 下から4行目: 小島宝素の『新修本草』復元本について, 「今は巻3の復元分が残るだけである」と記したが, 宝素は巻1・2以外のすべてを復元し, その全部が台湾国立故宮博物院に現存していることを, 東洋医学総合研究所の小曾戸洋氏からお教え頂いた(小曾戸洋・原中瑠璃子・小林茂三郎, 漢方文献の善本を所蔵する図書館とその利用法: その2, 台湾国立故宮博物院所蔵楊守敬観海堂本, 薬学図書館, 27(1)25-32, 1982年)。

「薬品会・物産会年表, 増訂版」(本誌, 29号, 2000年)

p. 56, 表に, 「文化5年, 1808, 9月, 〃, 花史雑記(素馨)」を追加。

p. 57, 文政2年の項: この行を削除。

p. 57, 文久2年の項: 日付を「4/18-19」, 資料を「『伊藤圭介日記 8』(名古屋東山植物園, 2001年)に替える。

p. 60, 天保14年の項: 日付を「9/17-19」, 資料に「鍾奇斎日々雑記」を追加。

◎御教示を頂いた渡辺好孝, 小曾戸洋の両氏に, 厚くお礼を申し上げます。